

# いま、白洲正子である理由

白洲信哉／青柳恵介／松井信義

新連載 東信『千紫万紅』

伝統をモダンに昇華させて

## 礼賛、和の逸品

# Kan'on



— 和を、遊ぶ — 「華音」  
かのん



2009  
Spring  
14

和太鼓ソリスト

# 上田秀一郎

未曾有の災害を機に、和太鼓の魅力に気づかされた上田秀一郎氏。  
海外や国内のステージで経験を重ね、和太鼓ソリストへと成長した上田氏が考える和太鼓の未来は？

写真/加藤史人

躍動する筋肉、ほとばしる汗  
鍛え抜かれた肉体に宿る日本の精神――



上田秀一郎 ● うえだ しゅういちろう 和太鼓ソリスト。1976年生まれ。兵庫県神戸市出身。1995年、和太鼓松村組結成に参加。1996年、和太鼓ソリスト・林英哲氏の『英哲風雲の会』最年少メンバーに抜擢され、日本全国で演奏。以後師事を仰ぐ。1997年より林英哲氏の全国ツアーコンサートに参加。2008年、平成中村座のヨーロッパ公演とその凱旋公演であるコクーン歌舞伎に、太鼓奏者としては初めて出演し、話題を呼んだ。3月5日(木)、東京・吉祥寺『STAR PINE'S CAFE』にて、笛奏者・田中傳十郎氏と共演予定。  
HP: <http://www.raku.co.jp/ueda>

上田秀一郎氏が叩く和太鼓の音を聞いてみると、心はいつしか日常を忘れ去り、体は音の湯船に浸っている…。そんな感覚に陥る。そして演奏が終わると、軽い運動をした後のように、心身ともにすっきりしていることに気づく。

「海外でも日本でも、和太鼓を初めて聞いた人に『懐かしい』と言われます。私の師匠である林英哲は、太鼓の音が胎内で聞く音に似ているからかもしれない、と言います」

上田氏は高校3年のとき、音楽教諭に誘われて和太鼓を始める。

翌年の1月、阪神・淡路大震災が起きた。

幸い被害が少なかった上田氏と仲間は、被災地の人を励ますために演奏を始め、それがひとつの転機となる。

「被災者の方々が、本当に喜んでくれて、『死のうと思っていたけど、明日からがんばれる』と言われました。太鼓には、人の心を動かす力があると感じ、これを職としていけたら、と思うようになったのです」

その後、和太鼓ソリストの第一人者・林英哲氏の全国ツアーに参加し始め、本格的なプロ活動をスタートさせた。

「太鼓は単純な楽器だけど、目に見えない奥深いものがある。太鼓の音が、観客の心を動かし、会場の反応や雰囲気演奏者と

共鳴し合い、また、共演者との掛け合いが、演奏者本人の盛り上がりにもつながります。無心ではいられないですね」

2008年には、太鼓奏者としては初めて、歌舞伎にも客演した。

「ふだんなかなか出会えない人に出会い、刺激を受けて、世界観が広がりました」

太鼓を始めて丸14年。ピアノ、サクソフオン、津軽三味線や笛など、様々なジャンルの楽器との共演を重ねてきた上田氏。今後も新たな共演者とともに、太鼓の可能性を突き詰めていくのだろう。

「音楽としての太鼓、舞台芸術としての太鼓の魅力を知ってほしいと思います」